

Title	身の上相談の計量的分析 : 家庭問題に注目して
Author(s)	大瀧, 友織
Citation	年報人間科学. 26 P.75-P.88
Issue Date	2005-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25879">https://doi.org/10.18910/25879</a>
DOI	10.18910/25879
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 身の上相談の計量的分析——家庭問題に注目して

大瀧 友織

### 〈要旨〉

質的データが社会学において有用であることは周知の通りである。しかし、これまで質的データを計量的に分析するための手法であるコンピュータ・コーディングは、ほとんど利用されてこなかった。本稿は、身の上相談記事を資料として、妻たちが人生のどのステージで、家内領域の仕事に對するどういった不満を抱えているのかを明らかにするために、コンピュータ・コーディングを利用して分析する。分析の結果、次のことが確認出来た。(1) 最も多い子どもに関する悩みは、妻の人生のどのステージでも問題化している。(2) 家事に関する問題も、妻の年齢と関連はない。しかし、(3) 「息子」「娘」という形で言及している悩みは、結婚や就職など子の大きなライフイベントに直面していることが多く、高齢の妻からの相談によく見られる。(4) 父母および義父母についての悩みは、結婚や出産という変化の直後に摩擦や軋轢が生じやすく、若い妻からの相談によく現れている。

### キーワード

家庭問題、身の上相談、コンピュータ・コーディング、質的データ

## 1 はじめに

### 1・1 分業型夫婦関係の現在

性別役割分業は近代家族を特徴づける性格のひとつであり、高度経済成長長期に広く浸透したとされる(落合 1997)。性別役割分業は公共領域と家内領域に区分することができ、女性の社会進出の増加により前者が揺らぎつつあることや、意識の上で分業に同意しない人が増えていることが知られている(国立社会保障・人口問題研究所 1998)。

しかし、家内領域での分業は今もなお強固に維持されている。「男は仕事、女は家庭」という典型的な性別役割分業は、変化しつつあるとはいえ「出産後は家庭に」、子育て後はパートに、老親介護が必要になれば家庭に」という「修正的性別役割分業」へのシフトにとどまっている(善積 2000)。また、男性の家事参加は進まず、その背景にある長い労働時間の問題も指摘されている。現在は、変化しつつある意識と、それに対応していない、あるいは対応できない実体との乖離が進み、さまざまな問題が生じている状況であると言えるだろう。

### 1・2 本稿の課題

家内領域での仕事をめぐる問題は、家族の役割構造に関する研究の中で古くから検討されてきた(小山 1967)。その研究内容は時

代とともに変化してきており、誰が何を分担しているかという研究から、役割分担関係に影響する要因を明らかにする研究へと移ってきているとされる(長津他 1997)。その中で、夫の育児参加を阻む要因のひとつとして、母親が自らを過剰に母親役割に縛り付けていることや(山根他 1990)、性別役割分業を肯定する認知枠を前提にしているために、共働きの妻の半数以上の人が家事・育児に関して夫の「協力」ではなく「助力」を求めるにとどまっているということが指摘されている(布施 1990)。

このような形で性別分業を内面化している妻たちが、どのような問題状況に直面しているのかを検討することは、現在および今後の夫婦関係を考察していく上で意義のあることである。本稿では家内領域の仕事に対する不満を包括的に捉えるために、身の上相談記事を資料とする。従来、身の上相談のような資料を利用する場合、コンピュータを利用した計量的な分析はほとんど行われてこなかった。そこで、本稿では妻たちが長い人生のどういった時期に、どのような悩み・問題を抱えているのかを計量的に明らかにした上で、事例にあたりその背景について検討する。

## 2 身の上相談研究

### 2・1 身の上相談を利用するメリット

身の上相談が資料として有用であることは周知の通りであり、身の上相談記事を用いた調査研究は、すでにいくつも行われている

(池内, 1953; 見田, 1963; 袖井・宮崎, 1977; McKinstry and McKinstry, 1991)。その中でもっともよく知られているものとしては、見田宗介による「現代における不幸の諸類型」が挙げられる。見田は、身の上相談が持つ次の二点の特質を指摘している。第一は、日常生活では潜在化しているような問題が、より鮮明に顕在化しているという点である。第二は、友人や同僚にさえ言えないことを、自ら進んでうち明けようとしている点である(見田, 1963)。この二点があることによって、詳しい生活の状況や心情など、本来知ることが難しい情報を入手することができる。

また本稿の関心から考えると、身の上相談資料が持つ利点として、見田が指摘した二点に加え、第三、第四の特質を挙げることができ。第三は、身の上相談においては、相談および回答が合わせて一般に公開されているため、誰もが入手・利用できるといえる点である。公的な機関に保管されているようなデータは、入手・利用が難しいというだけでなく、仮に利用できたとしても、公表する際にプライバシーの問題で困難に直面することになる。またすでに公開されているデータを利用することは、調査それ自体による影響を回答者に与えずにすむという点においても、重要であると言える。

さらに第四としては、身の上相談欄は毎回ほぼ同じ形式・字数で掲載されているため、記事数をカウントしたり、各々を比較したりすることができるという点が挙げられる。同じ新聞記事であっても、身の上相談欄を対象としない場合は、ある事柄に対する言及が増えたあるいは減ったということを示すことが比較的難しい。なぜなら、

増減の判断基準を記事数にするべきなのか、記事の面積にするべきなのか、記事の文字数にするべきなのかといった問題に直面せざるを得ないからである。この点も、身の上相談欄が持つアドバンテージのひとつであると言える。

身の上相談は、第一、第二の点があるために夫婦関係の内実を知ることができる資料であり、第三、第四の点があるために、比較的容易に大量に収集して、コンピュータ・コーディングという手法で分析することに適した資料でもあると言える。

## 2・2 身の上相談を利用するデメリット

どのような資料にも、メリットとともにデメリットが存在するが、重要なことはデメリットによってどのような点で制限があるのかを認識して分析に臨むことであろう。ここではまず、先行研究で指摘されている、身の上相談が持つ問題点から見ていこう。袖井孝子と宮崎英子は、身の上相談資料を用いて分析する際に、以下の三点の限界があることを指摘している。

第一は、相談者について地域的・階層的な偏りが生じることである。この点については、「障害」のある人々など、投書を書くことができない人がいることが挙げられている。また階層の高い人々は一般的に身の上相談をあまり利用しないと考えられていることや、読売新聞を購読していない人々がいることに加え、購読者が首都圏に集中している点が指摘されている。

第二は、内容による偏りが生じることである。投書が採用される

までの過程は、おおよそ次のようなものである。編集者が投書を一  
通り読んであら選びをし、回答者の専門に合わせて投書を分けて送  
るが、そこからさらに回答者が「ぜひ答えたい」と思うものを採用  
する。このような過程において、新聞に掲載するのがふさわしくな  
い内容や、制度上の変化を必要とする問題、あまりに個人的で特殊  
な問題などは落とされやすい。袖井らはさらに、第三として回答者  
による限界を指摘している。回答者の好みに合わない内容が取り上  
げられないことや、同じ回答者の場合回答内容がほぼ一定するとい  
うことが挙げられている(袖井・宮崎, 1977)。

さらにもう一点、資料そのものが持っている問題点ではないが、  
身の上相談を資料とする際に念頭においておくべき偏りが挙げられ  
る。それは相談者でも、編集者・回答者でもなく、分析者による偏  
り、つまり分類の恣意性という問題である。身の上相談を資料とし  
て何らかの事象を分析する場合、その事象に対する言及が多い／少  
ない、増えた／減ったということを示すための分類作業が不可欠と  
なる。しかし、言うまでもなく身の上相談にはさまざまな問題が寄  
せられており、その作業は容易なものではない。

たとえば池内一は、身の上相談を分類しているものの、その分類  
には異論の余地があることを認めている(池内, 1953)。また、袖  
井と宮崎は「複数の問題が重なりあっているケースもあり、明確に  
分けることはかなり困難である。それらについては内容をよく検討  
し、なるべく比重の多いものを採用することにしたが、分析者の主  
観がある程度入りこんでいることを断っておきたい」と述べている

(袖井・宮崎, 1977)。

どのような研究でも、ある程度研究者の主観が入りこむことは否  
めない。しかし、身の上相談を分類する上で、その基準を明確に示  
すことができなければ、どのような相談が多いのか少ないのか、言  
い換えれば何が典型で、何が例外かを判断することが難しくなる。  
つまり、分析結果に影響を及ぼす大きな問題であると言えよう。

### 3 分析方法とデータ

#### 3・1 コンピュータ・コーディング

従来、ほとんどの身の上相談研究は、分析者が典型的だと考える  
事例を引用し解釈するという方法で行われてきた。つまり、何が典  
型的であるかを客観的に示す基準が曖昧であった。また、質的  
データを数値化して計量的に分析しようとする、努力がおおきく、  
基準の曖昧さからコーディング過程でのデータの信頼性低下の危険  
性も高い。そこで、本稿ではコンピュータ・プログラムを用いてコー  
ディングするという方法を採用する。

コンピュータによるコーディングという手法を用いることによっ  
て、明確な基準によって数の多い事例を典型、数の少ない事例を例  
外として取り上げることが可能になる。それと同時に、労力の節約  
という実践的な問題も解決できる。もちろん、コンピュータを用い  
たところで、完全に客観性を保つことができるなどと楽観的に考え  
るわけではない。しかし、少なくともすべてを分析者が分類するこ

とに比べれば、基準の曖昧さを大幅に低下させることができるし、またコーディング過程を客観的に示すことが可能となるのである。

### 3・2 データの概要

本稿で用いるデータは、一九九八年一月一日から二〇〇二年十二月三十一日までの読売新聞「人生案内」欄で、合計二五一八件の記事である<sup>③</sup>。身の上相談記事の中でも「人生案内」欄を選んだ理由は、読売新聞が日本でも最大手の新聞で購読者数が多く、一般読者を対象にした身の上相談を分析するにはもっとも適していると考えたからである<sup>④</sup>。

表1は、年齢別・男女別に投書数およびその割合を示したものである。まず、女性については三十代からの相談が三一・九%でもっとも多く、次いで二十代、四十代、五十代となっている。男性については傾向が大きく異なっており、六十代以上の相談がもっとも多く、全体の三一・一%を占めている。また、五十代からの相談も比較的多くなっており、五十代と六十代以上を合わせると四五・五%にのぼる。男性は、女性に比べて高年齢層からの相談が多いという特徴があると言えよう。以上のことを確認して、以下では具体的な分析を進めていきたい。

## 4 分析

身の上相談には、言うまでもなくさまざまな悩みが寄せられてお

表1 相談者の年齢と性別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	年齢不明	計
女性	90 6.7%	342 25.6%	427 31.9%	177 13.2%	145 10.8%	131 9.8%	26 1.9%	1338 100.0%
男性	12 6.7%	34 18.9%	32 17.8%	13 7.2%	26 14.4%	56 31.1%	7 3.9%	180 100.0%
計	102 6.7%	376 24.8%	459 30.2%	190 12.5%	171 11.3%	187 12.3%	33 2.2%	1518 100.0%

表2 男女別投書に占める配偶者に言及している件数と割合

		10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	年齢不明	計
妻から	夫に言及の割合	3.3%	37.7%	62.3%	67.2%	69.0%	67.9%	38.5%	53.5%
	夫に言及件数	3	129	266	119	100	89	10	716
	相談数	90	342	427	177	145	131	26	1338
夫から	妻に言及の割合	0.0%	2.9%	34.4%	61.5%	65.4%	51.8%	14.3%	37.2%
	妻に言及件数	0	1	11	8	17	29	1	67
	相談数	12	34	32	13	26	56	7	180

り、高校生の恋愛相談や、騒々しい上階の住人についての悩みなど、本稿では対象としない記事も多く含まれている。そこで、まずすべ  
 での記事から配偶者に言及している相談を抽出した。前述したよう  
 に、本稿の関心は妻たちが抱えている家庭問題を検討することにあ  
 る。しかし、参考までに夫からの相談についても言及する。なぜな  
 ら性別によって家庭問題の捉え方が大きく異なっていると考えられ  
 るからである。また、若い人と年配者でも同様に捉え方は違ってい  
 ると思われる。そこで、性別と年齢という2つの軸を中心にすえて、  
 分析を進めていく。表2は、相談件数、配偶者に言及している相談  
 件数、そしてその割合を、男女別・年代別に示したものである。<sup>5)</sup>  
 既に述べたように、現在の「修正的性別役割分業」は「出産後は  
 家庭に、子育て後はパートに、老親介護が必要になれば家庭に」と  
 いう状態であると言える。そこから、家内領域の仕事をめぐる悩み・  
 問題としては、家事に関する問題、子どもに関する問題、親（実父  
 母・義父母）に関する問題の3つが想定出来、さらにその中で以下  
 の6つのコードを作成した。<sup>6)</sup>

- (1) 家事に関する問題：掃除、洗濯、買い物など①「家事」全  
 般への言及。
- (2) 子どもに関する問題：②「子ども（男女とも）」③「息子」④  
 「娘」（子の性別によって違いが出る可能性があるため）へ  
 の言及。
- (3) 親に関する問題：⑤「父・母」⑥「義父・義母」への言及。

#### 4・1 男女差について

表3は配偶者に言及しており、  
 かつ上記の6つのコードにも言及  
 している相談件数およびその割合、  
 男女の割合差（女性の値から男性  
 の値を引いたもの）を示したもの  
 である。性別と各コードについて  
 カイ二乗検定をおこなったところ、  
 「子ども（男女とも）」「義父・義  
 母」については1%水準、「家事」  
 については5%水準で有意な関連  
 が認められた。つまり、これら3  
 つのコードは、夫より妻がより多  
 く訴えている問題となっているこ  
 とが分かった。<sup>7)</sup>

#### 4・2 年代差について

次に、対象を女性に限定して、  
 相談者の年代と各コードの相関係  
 数を検討した。その結果、6コー  
 ドの内「息子」「娘」「父・母」  
 「義父・義母」の4コードについ

表3 夫婦問題で各コードに言及している投書の件数と割合およびその差

コード名	女性件数	パーセント	男性件数	パーセント	パーセント差
子ども（男女とも）	626	87.4%	49	73.1%	14.3%
息子	138	19.3%	12	17.9%	1.4%
娘	113	15.8%	14	20.9%	-5.1%
父・母	226	31.6%	14	20.9%	10.7%
義父・義母	139	19.4%	4	6.0%	13.4%
家事	76	10.6%	2	3.0%	7.6%

夫婦問題の相談件数：女性（n=716）、男性（n=67）

て1%水準で有意な相関関係があることが分かった<sup>⑧</sup>。図1は、有意な関連が認められたコードについて、年代別に等高線図として示したものである<sup>⑨</sup>。

図から明らかのように、「父・母」および「義父・義母」に言及している割合は、相談者の年齢が上がるほど小さくなっている。その反対に、性別が明示されている「息子」「娘」コードは、高い年代で言及されることが多くなっていた。ただし、「子ども（男女とも）」コードについては、どの年代でも非常に高い割合で言及されており、年代との間に有意な関連は見られなかった。

#### 4・3 男女差×年代差について

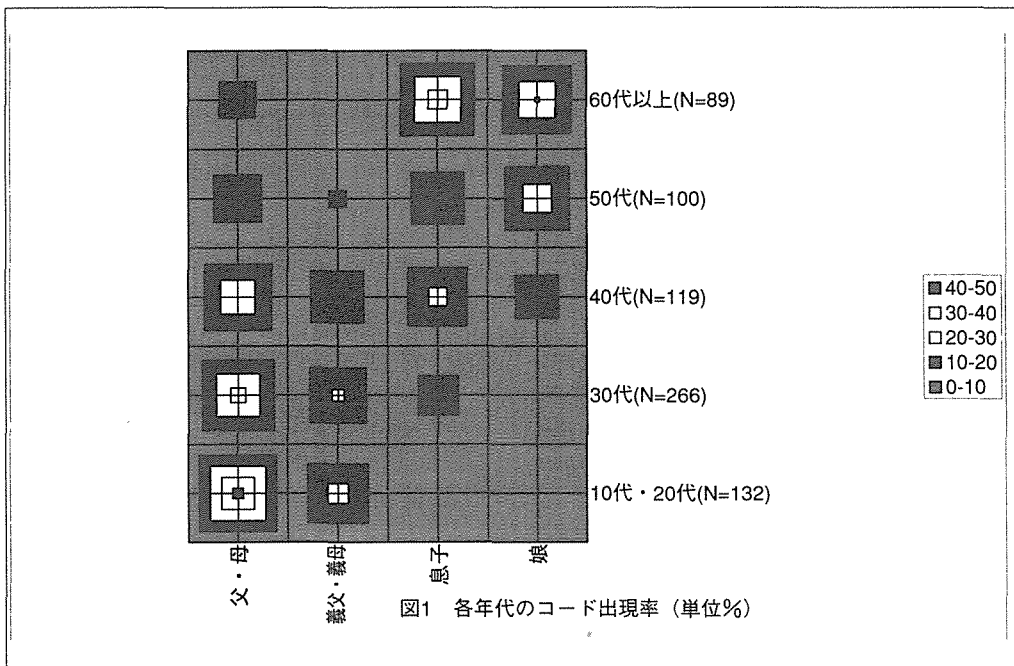
男女差と年代差の有無を軸にとることによって、各コードを分類した。図2は、各コードがどこに分類されているかを示したものである。男女差も年代差もないコードはなかったため、6コードは以下の3グループに分けられる。

(1) 男女差あり・年代差ありのコード：「義父・義母」

義父母に関わる問題は、夫よりも妻が訴える傾向が強い。また、実父母についてと同様、若い妻の相談中に義父母への言及が多い。

(2) 男女差あり・年代差なしのコード：「子ども（男女とも）」  
「家事」

この2コードのみ、相談者の年齢と関連がなかった。言い換えれば、こういった不満・問題は、年齢にはかかわりなく、妻の人生のどの期間においても生じるといえることである。ただし性別による有





意差はあり、夫よりも妻の投書により多く見られた。

(3) 男女差なし・年代差ありのコード：「息子」「娘」「父・母」この3つのコードについては、いずれも性別による違いは見られなかった。年齢別には、息子や娘への言及は、中年や高齢の妻からなされやすいのに対して、父母への言及は若い年代の妻に多い。

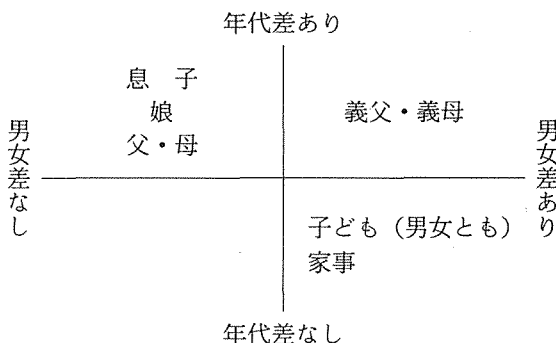


図2 男女差×年代差で分類したコード

## 5 事例の検討

ここまで、身の上相談に現れる悩みを計量的に分析してきた。その結果、性別や年齢によって問題の現れ方が異なっていることが確

認出来た。以下では、そのような違いが生じている背景を、事例にあたり具体的に検討していきたい。

5・1 「息子」「娘」「父・母」(男女差なし・年代差あり)の事

### 例

この3コードでは、いずれも年代差が見られた。相談者の年齢が高くなれば、息子や娘のいる可能性が高くなるので、この結果は一見当たり前のように見える。しかし、男女を含めた「子ども」コードに年代差が見られないことを考えると、何らかの別の要因があると推察出来る。ここで「息子」「娘」コードに言及しているケースを見てみよう。

(事例1) 五十代の主婦。二八歳の長男が結婚したいという女に、小学生の子どもが2人いるということを聞いて、目の前が真っ暗になりました。息子は初婚です。

夫は「そういう人を好きになったのだから、しかたない」と言いつつ、最近酒の量が増えたような気がします。私はとてもそんな風に考えることができません。何のために息子を一生懸命育ててきたのかわからなくなってしまう、眠れない夜が続いています。

振り返れば、3人の子どもを夢中で育て、娘2人は既に結婚。ほっとしたところでした。これからは夫婦2人でたまに旅行でもと思っていた矢先の息子の結婚話に、そんな気分も吹っ飛んでしまいました。(2002年3月19日)

(事例2) 五十代の主婦。二二歳の娘はフリーターで、自宅にいる時には携帯電話を片時も離さずメールを打っています。パソコンにもしょっちゅう向かってメールを書いているようです。あまり度が過ぎるので、相手は誰なのかを度々聞いても、「友だち」としか答えません。

何か隠している様子なので、娘が不在の時に携帯やパソコンをのぞいてみると、いやらしい写真や卑卑(ひわい)な言葉がたくさんありました。それだけでなく、中年男性と楽しそうに風呂に入っている画面を見た時は、全身が凍りつくようでした。

娘をしかると、異常に怒り、話し合いになりません。娘は世間知らずで、外でしていることが信じられないくらい幼稚です。夫にも相談できず悩んでいます。これから娘をどう導いていったらよいのでしょうか。(2002年10月23日)

事例1は息子、事例2は娘の結婚にまつわる問題である。息子、娘ともに結婚の話題が目立つが、それ以外の事例としては、恋愛や離婚、就職や仕事に関する問題が挙げられる。四十代、五十代、六十代の相談者は、子どもの人生における大きなライフイベント、すなわち子のジェンダーを意識せざるを得ない問題に遭遇しているのである(3)。

そのために「子ども(男女とも)」コードでは年代差が出ていなかったのである。また性差が見られないのは、子どもの人生における重要な問題であるがゆえに、妻のみでなく夫婦がともに悩んでいる

のだと考えられる。「父・母」コードについては次項で「義父・義母」とともに述べることにする。

#### 5・2 「義父・義母」(男女差あり・年代差あり)の事例

「義父・義母」コードは、「父・母」コードと同様に、相談者の年齢が上がるにつれてほぼ一貫して減少していた。もちろん、相談者が高齢になると言及すべき義父母がいなくなるという理由もあるが、事例を検討するとそのみではないということが分かる。

(事例3) 二九歳の主婦です。義父母が子供におもちゃを買い与え過ぎて困っています。近くに住んでいるのでよく遊びに行くのですが、そのたびにおもちゃ屋へ連れて行き、何かしら買います。誕生日やクリスマスなど特別な日以外はおもちゃでなく本にするなど工夫してほしいと私や主人が頼んでも、聞く耳を持ちません。(1998年2月23日)

(事例4) 二十代の会社員。同居していた義父母は私たちの結婚後、仕事をやめて遊んで暮らすようになりました。お金がなくなると、金融機関からお金を借りていましたが、「きちんと返すから名義を貸してほしい」と言い出すようになり、夫名義の借金を重ねました。(2001年2月15日)

以上はいずれも義父母についての問題である。幼い孫への接し方

や金銭問題、他には義父母と実父母の関係などでも相談者は悩まされている。これらは、結婚初期の比較的若い夫婦に生じやすい問題である。義父母への言及が若い妻からの相談に多いのは、結婚や出産という変化のあと、義父母との不和や軋轢、摩擦が生じやすくなっているからであることが分かる。

また実父母に対しては「二十代の主婦です。結婚して4年、夫と2人の子供とともに幸せに暮らしているのですが、母がいまだに結婚を認めてくれません(2000年2月16日)」という不満の他、「1年前に子供を産んでから、実家の両親が気にかかって仕方ありません。子供ができて初めて、両親が私に、どんなに愛情を注いでくれたのか、気が付いたのです(1999年9月17日)」という心配する形で言及されているケースもある。

いずれも結婚初期に現れやすい問題であると考えられるが、現在の社会状況から夫―義父母関係に比べ、妻―義父母関係の方がより直接的に接する機会が多いため、義父母についてのみ男女差が見られたのである。

### 5・3 「子ども(男女とも)」「家事」(男女差あり・年代差なし)の事例

年代との間に有意な関連がなかったのはこの2コードのみである。まず、子どもに言及している相談は最も数が多い。また、子どもの進学など教育方針の問題や非行、離婚に際しての子どもの存在や親権についてなど、その内容もさまざまである。年代差がない、つま

りどの年代からも訴えられているこれらの問題は、妻の生活に組み込まれていると言える。例えば、家事については次のような事例が挙げられる。

(事例5) 二七歳の専業主婦です。(中略) 自分なりに精いっぱい、家事も育児もやっているつもりです。ところが、体調が悪い時に冷凍食品を出すと、夫は機嫌が悪くなります。夫に言わせると、「主婦のくせに一日何やってるんだ」となります。毎日、夕食の用意をするころになると、吐き気や胃の痛みで苦しいほどです。でも、夫は気づいてくれません。倒れるまで働かないとわかってもらえないのでしょうか。離婚はしたくありません。夫に嫌な思いをさせずに暮らすための心の持ちようを教えてください。

(1998年11月8日)(傍点筆者)

「倒れるまで働かないとわかってもらえない」と考える妻と、それに「気づかない」夫。妻が抱える問題は、それが日常に潜在化しているために、より一層深刻なものとなっていることが分かる。以上2つのコードについては、妻への負担が重く、かつどのライフステージにおいても悩みになり続けているという点で、本稿で検討したどの問題よりも深刻であると考えられる。

## 6 おわりに

以上、家内領域での仕事に関する不満や問題について、身の上相談記事を資料とし、コンピュータ・コーディングによる質的データの計量的分析を行った。その結果、従来のように一つ一つの事例をただ単に解釈しては明らかに出来なかった、いくつかの点が確認出来た。

第一に、妻の生活で最も頻繁に悩みとして現れているのは子どもに関する問題である。その「子ども（男女とも）」および「家事」についての悩みは、妻の人生のどのステージにおいても現れており、夫よりも妻の肩に重く負担がかかっていることが分かった。布施が指摘していたように、妻たちが家事・育児について夫の「協力」ではなく「助力」しか求められない状況が（布施 1990）、妻の日常生活に悩みを作り出していることが明らかになった。

次に、結婚や就職といった子どもの大きなライフイベントの問題に直面している時、すなわち四十〜六十代の相談者は、悩みの中で「息子」や「娘」という形で言及していることが多い。ただし、男女の有意差はなく、妻、夫のいずれにとっても問題となっており、夫婦二人で抱える悩みとなっている場合も見られた。

最後に、（義）父母への不満や問題は、相談者自身が結婚や出産という変化を経験した直後に生じやすくなっていた。一般的にもよく知られているように、妻にとって義父母との関係は、夫にとって

よりも問題化しやすいということが改めて確認出来た。

今後の課題としては、資料的な制限もあり十分に検討出来なかった、内容別に分類した家事の問題や、男性側の悩みの詳細な分析が挙げられる。また、日本語は英語に比べてコンピュータで扱うことが難しいという理由もあり、現在のところ質的データの計量的分析はまだそれほど行われていない。コンピュータを利用すると、コーディング基準が揺るがないなどのメリットがある一方で、意味の解釈を行わないために融通が利かないというデメリットもある。今後は、そういった点を踏まえた上で、質的データの分析についてもコンピュータを利用した、より精度の高い新たな方法論を導入していくことが重要であろう。

本稿は、第十三回日本家族社会学会大会（二〇〇三年九月 於大阪市立大学）での発表原稿に、加筆・修正したものである。

### 注

(1) 量的に多い事例が必ずしも典型であるとは限らないが、ここでは、数多く寄せられている悩み・不満を典型的な事例、数の少ない相談を例外的な事例として捉える。

(2) 本稿では、KH Coderというコーディングプログラムを用いる（樋口 2004）。KH Coderは、川端亮が提案している「計量テキスト分析」を行うために作成されたプログラムである（川端 2004）。詳細については、<http://khc.sourceforge.net/>を参照。また、コンピュータ・コーディングを用いた身の上相談研究としては、（太郎丸 1999）

大瀧 (2004) が挙げられる。

- (3) 読売新聞「人生案内」欄の記事は、読売新聞の縮刷版およびインターネットのホームページ (<http://www.yomiuri.co.jp/life/jinsei/>) 上で入手することができる。
- (4) また、池内一は次のように述べて、身の上相談の歴史において、読売新聞が果たした役割の重要性を指摘している。「『身上相談』という言葉は紙上で用いたのも、これを独立のジャンルとして確立したのも『読売新聞』の力であった」(池内 1953: 13)。
- (5) 男女間には一六%以上の差があり、配偶者に言及している相談は妻に多いことが分かる。性別と配偶者に言及している相談についてカイ二乗検定をおこなったところ、一%水準で有意な関連が認められた。カイ二乗値は一六・八五九、Cramer の V 係数は・一〇五である。
- (6) 「祖父・祖母」「孫」への言及も検討したが、件数が非常に少なかつたため、ここでは割愛した。
- (7) 性別と各コードについてのカイ二乗値および Cramer の V 係数は以下の通りである。  
「子ども (男女とも)」: Pearson のカイ二乗値 = 一〇・五三〇、Cramer の V = 一・一六  
「義父・義母」: Pearson のカイ二乗値 = 七・四一七、Cramer の V = 〇・九七  
「家事」: Pearson のカイ二乗値 = 三・九七六、Cramer の V = 〇・七  
「息子」「娘」については正の相関関係、「父・母」「義父・義母」では負の相関関係があった。また相関係数は、「息子」・一一・二、「娘」・一一・九、「父・母」・一一・〇、「義父・義母」・〇・九七である。
- (9) 有意な相関関係が見られなかったコードは「子ども (男女とも)」

「家事」の2つだった。「子ども (男女とも)」は、八七%前後の言及があり、他のコードと比較すると極端に高い値を示していた。「家事」については、六%から一三・六%の間で変動しており、十代・二十代および三十代、六十代以上で十%を越えるやや高い値を示していたが、有意な関連ではなかった。

- (10) 女子に比べ男子の方が「息子」あるいは「長男」として言及されることが多かった。その違いが図1の三十代における「息子」「娘」両コードの差の要因となっていた。

#### 【文献】

- 布施晶子, 1990, 「女性の就労と家事・育児・老身介護」『家計経済研究』6: 14-21.
- 樋口耕一, 2004, 「テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1): 101-115.
- 池内一, 1953, 「身上相談のジャンル——新聞・雑誌の歴史から」思想の科学研究会編『芽』9・10: 8-13.
- 川端亮, 2004, 「計量的テキスト分析」『社会調査における非定型データ分析支援システムの開発』平成13~15年度科学研究費補助金(課題番号B(2)13410049) 研究成果報告書: 1-12.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1998, 『第二回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 第一報告書 日本人の結婚と出産』.
- 小山隆, 1967, 『現代家族の役割構造——夫婦・親子の期待と現実』培風館.
- Krippendorff K., 1980, *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*, Sage. (三上俊治他訳, 1989, 『メッセージ分析の技法——内容分析への招待』勁草書房).
- McKinstry John A. and A. N. McKinstry, 1991, Jinsei Annai, "life's guide": *glimpses of Japan through a popular advice column*, Armonk, M. E. Sharpe.

- 見田宗介, 1963, 「現代における不幸の諸類型」『新版現代日本の精神構造』弘文堂: 1-56.
- 長津美代子・細江容子・岡村清子, 1997, 「夫婦関係研究のレビュートと課題——1970年代以降の実証研究を中心に」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編『いま家族に何が起っているのか: 家族パラダイムの転換をめぐる』ミネルヴァ書房: 159-186.
- Neuburger, Robert, 1997, *Nouveaux couples*, Odile Jacob. (藤田真利子訳, 2002, 『新しいカップル——カップルを維持するメカニズム』新評論).
- 落合恵美子, 1997, 『21世紀家族へ: 新版』有斐閣選書.
- 大瀧友織, 2004, 「夫に対する役割期待の変化——妻からの不満をとおして」『家族研究年報』28: 51-62.
- Shorter, Edward, 1975, *The Making of Modern Family*, Basic Books. (田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳, 1987, 『近代家族の形成』昭和堂).
- 袖井孝子・宮崎英子, 1977, 「日常性のなかの老人問題——身上相談にみる10年間の変遷」東京都老人総合研究所編『社会老年学』7: 3-23.
- 総務省統計局・統計研修所編, 2003 『日本の統計2003年版』財務省印刷局.
- 太郎丸博, 1999, 「身上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」川端亮編『非定型データのコーディング・システムとその利用』1996-1998年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪大学: 139-155.
- 山根真理・松田智子・斧出節子・関井友子, 1990, 「保育園児をもつ母親の育児問題——育児不安を中心にして」『総合社会福祉研究』2: 110-121.
- 善積京子, 2000, 「結婚制度のゆらぎと新しいパートナー関係——結婚の意味が問われる時代」善積京子編『結婚とパートナー関係 問い直される夫婦』ミネルヴァ書房: 1-23.

# Quantitative Analysis of Advice Columns about Domestic Issues

OOTAKI Tomoori

It is common knowledge that qualitative data is useful in sociology. Although, computer coding which is the way of analyzing qualitative data quantitatively has been scarcely utilized. In this paper, I introduce this way of analysis.

The purpose of this paper is to explore the dissatisfactions of wives with work in a family domain by computer coding. To deal with this, I examine what kind of dissatisfaction they have and which stage in their life they experience it at. The material used is all 1518 cases by personal-advice columns in newspaper.

As a result of analysis, the following results were obtained: 1) Most of dissatisfactions are related with "children". These appear in every stages of the life of wives. 2) Dissatisfactions about housework are not irrespective of wives' age. However, 3) Lots of dissatisfaction about "son" and "daughter" is related to big life events of them as marriage. Accordingly, most of these dissatisfactions occur to middle-aged wives. 4) Dissatisfactions about parents are easy to occur just after marriage and childbirth. Therefore, these dissatisfactions tend to occur to young wives.

## Key Words

domestic issues、 advice columns、 computer coding、 qualitative data